予告

FUTURE EVENT 01 「なんきち村のこども」キッズワークショップフェスティバル2013 〜in南吉のふるさと半田〜 参加

2013年8月25日［日］
新美南吉記念館（愛知県半田市）

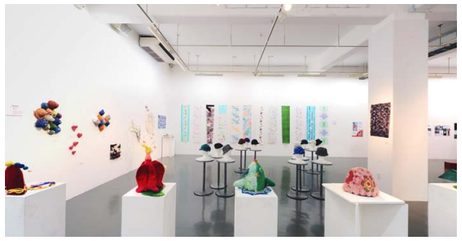
2013年、新美南吉の故郷である半田市では新美南吉生誕100年を記念し、様々なイベントが開催されています。名芸大学生チームは、こどもワークショップを企画しイベントに参加します。ワークショップでは、新美南吉作品を題材とした小さな村が設置され、子ども達は各々が村に住む事を想像し、住む家とその周辺を制作し、村の住人となります。新美南吉作品の世界観と子ども達の豊かな創造性が交わる事でつくりあげられる〈なんきち村〉是非、お楽しみ下さい。

対象：小学生（その他観覧可）
主催：特定非営利活動法人　半田市観光協会
共催：名古屋芸術大学デザイン学部スペースデザインコース

FUTURE EVENT 02 素材展 クラフトブロック前期制作展

2013年7月26日［金］－ 8月7日［水］
名古屋芸術大学アート&デザインセンター

デザイン学部クラフトブロックのメタル＆ジュエリーデザインコースとテキスタイルデザインコースの学生による前期授業制作展です。期間中展示替えを行い、様々な素材を活かした作品をご紹介します。
前期：2〜3年生　7月26日ー7月31日
後期：4年生、大学院生　8月2日ー8月7日



昨年度の展示風景

FUTURE EVENT 03 “解き放たれた約束” 〜吉岡弘昭全版画 1967〜2013 出版記念展

2013年9月20日［金］－ 25日［水］
名古屋芸術大学アート&デザインセンター

日本のドライポイントの第一人者であり、本学美術学部版画コースの非常勤講師でもある画家の吉岡弘昭氏の2013年秋に予定されている『カタログ・レゾネ』（阿部出版）の出版を記念した展覧会です。吉岡氏の銅版画を展示する他、吉岡ワールドを楽しく魅せるインスタレーションなどが予定されています。

吉岡弘昭「緑色の中の犬」
size：30×40cm
撮影：山口幸一

2013 4-9 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15ー18:00（最終日は17:00まで）日曜・祝日休館　**入場無料**　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

4/19（金）→	4/24（水）	齊木俊秀　彩織部の軌跡展／sabbat
4/26（金）→	5/ 8（水）	Q2Q2 7days／写真部 シガツバカ
4/10（金）→	5/15（水）	ラテルナ・マギカ（幻灯）;フェロー諸島から
5/17（金）→	5/22（水）	テレピンペトロール／fira
5/17（金）→	5/29（水）	THE MEDAL COMPLEX2
5/24（金）→	5/29（水）	peace nine 2013／Big Crunch
5/31（金）→	6/ 5（水）	創作折紙作品展／Yoooooo!!!／パンVS米
6/ 7（金）→	6/12（水）	スペシャリティーズ
6/14（金）→	6/19（水）	教員展
6/21（金）→	6/26（水）	名古屋芸術大学OB・OG展／メディアデザインコース"展覧会デザイン"展
6/28（金）→	7/ 3（水）	「くうねるところにすむところ」展
6/28（金）→	7/ 3（水）	第4回神戸コレクション展「日本人が愛した東洋の美術」
6/28（金）→	7/ 3（水）	コミュニケーションアート&デザイン展
7/ 5（金）→	7/10（水）	四年生はたいへんだ
7/12（金）→	7/17（水）	2013年度前期留学生作品展
7/19（金）→	7/24（水）	洋画1コース3年展
7/26（金）→	8/ 7（水）	素材展
8/10（土）→	9/18（水）	2013年度企画展 桑山忠明 Titanium-Art as Space, Space as Art
9/20（金）→	9/25（水）	“解き放たれた約束” 吉岡弘昭 全版画1967〜2013 出版記念展
9/27（金）→	10/ 2（水）	名古屋芸術大学「彫刻コース展」
9/27（金）→	10/ 2（水）	洋画2コース3・4年選抜展「ソナチネ」

編集後記

今回特集の対談で心に残ったのは「自立」するということ。作品に限らず何かを作る作業というのは割と孤独で、だけど一人になりたいのかと言うとそうでもなくて、じゃあなぜ作るのかというと、それは対話する為なんじゃないでしょうか。自立から生まれたモノは受け手と対話し、観る者をも自立させる。そんな連鎖が心地よいコミュニケーションになってゆくんじゃないかなと。8月の企画展でどんな対話が生まれるのか、とても楽しみです。

惣城友美（アート＆デザインセンター）

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL［0568］24-0325　FAX［0568］24-2897

B!e Vol.37
発行日　2013年7月4日
編集　髙橋綾子（美術学部美術文化コース）／惣城友美（アート＆デザインセンター）
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2012　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts

デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
B!e NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS　2013.Vol.37

桑山忠明の「空間」

Art as Space, Space as Art

2013年度美術学部　公開講座

対談：桑山忠明の「空間」について

Art as Space, Space as Art　2013年5月14日［木］　名古屋芸術大学西キャンパス B棟大講義室

林道郎
美術批評／上智大学国際教養学部教授

If art is pure, it should be timeless

同時代に生きる芸術家と批評家との幸福な関係とは何か？個人的な交流があってもなくても、芸術を介して互いを刺激し合える対等な関係であるはずだ。

名古屋芸術大学に桑山忠明さんを招いての特別講義では、大学生たちを前に桑山芸術をナビゲートする対話者として、批評家の林道郎さんに登場いただいた。

まず対談のプロローグとして記録映像「KUWAYAMA PROJECTS 1996」（Chuck Smith監督）を上映。そこには桑山さんと穏やかに語らう批評家・多木浩二（1928-2011）さんの姿があった。その毅然とした佇まいと示唆的な言葉は印象的で、お二方の共感が画面から伝わってきた。

「多くの人が桑山さんをミニマリストに近づけて理解しているが、そうではない。そういうものの彼方にある、ビヨンドなんですね。そういうコンセプトを見つけようと。それは概念芸術でもない、コンセプチュアルアートとも言えない。」

桑山さんは、この理解者を前に生き生きとした口調で、こう言い切った。

「もし、もしですよ、こういう芸術というものがほんとにピュアに成り立った場合は、タイムレスじゃないですか。まだまだ、これから除くことがいっぱいあるんですよ。」

同時代の批評家。一昨年亡くなった多木さんの後に続く批評家の立ち位置として、真っ先に意識されたのが林道郎さんだった。明晰かつ柔軟な分析を交え、林さんは桑山さんの作品を語り、対話がはじまった。この日、芸術家と批評家、そしてその対話に耳を傾けた聴衆との幸福な関係と時間があった。

髙橋綾子　美術学部准教授

桑山忠明
アーティスト／2013年度
名古屋芸術大学美術学部特別客員教授

桑山忠明の「空間」

Art as Space, Space as Art

“シルバーとゴールドっていうのは人間の歴史、
美術史から見ると実は象徴性の高い色。
それが桑山さんが使うとまったく象徴性の剥ぎ
取られた零度の状態に還元されている”（林）

“僕が思っていた、やっていたことはつまり、
今までにあったことを否定する、
次の時代のものを創るということ。（中略）
ニュートラルにアートだけで成り立たないか、
それの繰り返しなんです。
その実験を、いまだに
実験しているんです。”（桑山）

“良いと思える作品には大体そういう所があると思うんですが
美術作品の経験というのは、見る人を1人にすることなんですよ。
それは孤立させるという意味ではなくて、自立させる。”（林）

“アートとしての空間を創り出すまでのプロセス。
目を開いている間中、ものを創っている認識。
老けている暇がないんです。毎日が楽しくて。
ものを創り出すのが楽しい。”（桑山）

2013年度夏の企画展

桑山忠明

Titanium-Art as Space, Space as Art

2013年8月10日（土）～9月18日（水）

日曜休館　入場無料

12:15-18:00（最終日は17:00まで）

名古屋芸術大学アート&デザインセンター

2013.8.10 ～10.27　あいちトリエンナーレ2013　旅行企画事業

今回の企画展では、アート&デザインセンターの
ギャラリーBEの空間に新たな壁を作り、二つの空間に
作品が展開されます。

韓国での個展

TADAAKI KUWAYAMA GALLERY SHILLA Daegu,2013.5.10-6.30

http://www.galleryshilla.com/

1958年の渡米以後、主に欧米を中心に活動してきた桑山忠明氏の韓国で初となる個展が、釜山から電車で一時間ほどの都市・大邱（テグ）にあるGALLERY SHILLAにて5月10日から6月30日まで開催されました。

ギャラリーの開館二十周年記念として開催された本展は、チタニウムで製作された新作を含めて三つの作品群から成り、反復する作品たちそれぞれが独自の空間を作り上げました。そこからは展示空間という制限を超えた外部への広がりが感じられ、訪れた鑑賞者を新たな空間へといざなっているかのようでした。

ところで、近年とみに一面的なイメージだけではない日韓の隣国としての関係が、時に騒々しさを伴いながらも様々な分野・レベルで成熟さを帯びてきているように思われます。そんななか、韓国という場で開催された本展は、そこで日本人作家である桑山氏の作品と向き合った人々に、どのような感覚や印象を与えたでしょうか。

名古屋芸術大学アート&デザインセンターで8月10日より開催する桑山氏の展覧会では、今回の韓国での個展で出品された作品も含めて展示を構成し、「この場所」だから出現し得る空間が立ち現れます。鑑賞者・時間・場所などによってがらりと表情を変えるであろうその空間を、ぜひ直接体感してみてください。

島本昌典/アート&デザインセンター

レポート

REPORT 01

「SOUSOU×有松絞り×名古屋芸大」

2013年6月1日［土］・2日［日］
張正、ATSUMARI（久野染工）
名古屋市緑区 有松絞りまつり

張正ショップで藍色の手ぬぐいを販売

2013年6月1日、2日の両日、第29回有松絞りまつりが開催されました。この有松絞りまつりで、デザイン学部テキスタイルデザインコースの学生たちは、地場産業との連携授業で制作した手ぬぐいを販売しました。

このプロジェクトは今年で4年目になります。学生たちが、名古屋市緑区の有松産地の絞り染め工場「張正」と「久野染工場」で技法を学んで新たな柄をデザインし、産地で手ぬぐいを染めて、有松絞りまつりで学生自らが店頭に立って販売するものです。

初日は常連のお客さんも来られて、カラフルな手ぬぐいは瞬く間に売れ、終わりには完売しました。当日学生が着ていた絞りの上着は、彼女たちが発案、染める段階で失敗した手ぬぐいを2枚縫い合わせたもので、B反を捨てることなく活用しています。この評判がとても良く、接客中に「その柄はどこに売っているの？」と聞かれる程でした。

学生は、自分で商品化したものが目の前で売れ、お客さんから意見をいただくことが励みになり、制作のモチベーションに繋がるようです。

このようにテキスタイルデザインコースでは、地元の伝統産業の復興を目指して、学生のアイデアと伝統産業の技術力を結びつけ、市場に対して魅力的な布プロダクトを提案する地場産業との連携授業を2005年から継続的に行なっています。

さまざまな地地と連携授業を行っていますが、その中でも有松のプロジェクトは特別客員教授の若林剛之先生（SOU・SOUディレクター）に監修していただき、毎年6月初めに行われる有松絞りまつりに出店することを目標に産地見学から始まり、1年をかけて準備をしています。

ATSUMARIの敷地内の「まり木綿」ショップを運営する卒業生の村口実梨さんと伊藤木綿さんは、この授業を受講し、産地に飛び込みました。彼女たちが作るポップでカラフルな絞りの手ぬぐいや地下足袋は、伝統をベースにしながらも今までになかった新感覚の有松絞りとして大変人気があります。

デザインを学んだ卒業生が伝統産業を活力あるものにしていくことは、この授業の最も大きな目標です。今後も様々な形で、地元産業に貢献する学生を育成したいと思います。

扇　千花　デザイン学部教授

ATSUMARI ショップでカラフルな手ぬぐいを販売

板で締めた布を染色

染めた布を水洗

卒業生のまり木綿

「あいちメイドの公式グッズ　絞×染Bag」

「あいちトリエンナーレ2013 オフィシャルグッズ・学生コンペティション」で優秀作品に選ばれた「染×絞Bag」が販売されます。

これは、デザイン学部テキスタイルデザインコース扇千花研究室がデザイン、生産したもので、愛知県の伝統産業である有松絞りと知多木綿を使い、観客がトリエンナーレ会場で集めた展覧会のチラシを入れることに特化したバッグです。

あいちトリエンナーレ2013オフィシャルショップで販売されます。

■ あいちトリエンナーレ2013
http://aichitriennale.jp/news_data/2013/06/002410.html
■ クリエイティブ・デザインシティーなごや
http://www.creative-nagoya.jp/whatsnew/at2013-competition-shop-open/

ART WORDS FROM THE ART WORLD

京都造形芸術大学教授
藤本由紀夫
Yukio FUJIMOTO

芸術一話 第13話 出会い

名古屋で過ごしていた高校時代、学校に馴染めなくて良くさぼっていた。

昼間から市街をうろうろしていると補導されるということを知っていたので、午前中は美術館で過ごした。そして午後になると街をブラブラするのだが、その中でも比較的安全な場所が本屋だった。

ほとんど本を読んでいなかった私にとって本屋は、単なる暇つぶしの場所だった。そんなある日、丸善に入ろうとしたら、入り口のところにいろいろな本が山積みになっていた。自費出版書籍のバーゲンと書いてあった。なんのことかよくわからなかったが、その中に奇妙な装丁の本が目に入った。「一千一秒物語」「イナガキタルホ著」と書いてあった。不思議なタイトルと不思議な著者名に好奇心を覚え、500円という安さもあり購入した。

帰宅してページをめくると、「芸術とはココア色の遊戯である」とチョコレート色の活字で印刷された一行が目に入った。それから私は著者稲垣足穂を追い求めることとなった。古本屋を巡り、足穂を探すことにより、澁澤龍彦や加藤郁乎を知るようになり、「ダダから出発しなければならない」という一文から、美術館での作品の見方が変わり、マルセル・デュシャンの凄さに注目するようになった。

学校をさぼって行った本屋での出会いが、今の私をつくりだすこととなった。あの頃我慢して学校に行っていたら、ごく普通のサラリーマンになっていたのだと思う。出会いはとても大切なものだと思う。